浜離宮恩賜庭園におけるお伝い橋の修復について

1.　取組の概要

本取組は、浜離宮恩賜庭園の大泉水景観を構成するお伝い橋（写真－１）について、老朽化した木部材を更新し、従前の意匠と部材構成を継承しながら、耐久性及び安全性の向上を図った修復である。主要部材は新材に交換し、木取り、木表・木裏の使い分け、保存処理、保護銅板の葺設等により、素地仕上げの意匠を保ちつつ腐朽を抑制した。また、従来の木組み工法を基本とし、必要な箇所のみ外観上見えない位置で補強した。健全性を確認した石造りの橋脚は継続使用し、緑青が定着した既存の錺（かざり）金物は再使用することで、経年の色調や質感を含めた細部意匠の継承を図った。あわせて、中島の御茶屋の露台及び藤棚も修復し、大泉水周辺の庭園景観の連続性を維持した。

2.　浜離宮恩賜庭園、お伝い橋の概要

浜離宮恩賜庭園は、東京都中央区に位置する都立庭園であり、江戸時代に徳川将軍家の別邸である浜御殿として整備され、明治以降は皇室の離宮、戦後に東京都へ下賜された。東京湾の海水を引き入れ、潮の干満により水位や景観が変化する汐入の池（大泉水）を中心とした回遊式庭園であり、国の特別名勝及び特別史跡に指定されている。

お伝い橋は、大泉水内の中島及び小の字島を結ぶ総延長約 118 メートルに及ぶ総檜造りの３連の木橋であり、水面、中島の御茶屋、築山等と一体となって本庭園を特徴づける景観を形成している。橋上から望む景観だけでなく、周辺から望む橋と御茶屋の景観においても重要な構成要素である。一方、素地仕上げの木橋であるため雨水や湿気の影響を受けやすく、木部材の腐朽状況に応じた定期的な修復が不可欠である。近年、上部工を中心に傷みが顕在化したことから、前回工事から約 12 年を経て修復工事を実施した。

また、お伝い橋に付随する中島の御茶屋の露台及び３基の藤棚についても、老朽化した木・竹製部材を修復した。施工に当たっては、御茶屋の営業や来園者動線への影響を抑えるため、工事範囲と時期を調整し、令和５・６年度及び令和６・７年度の２期に分けて実施した。

３．修復方針

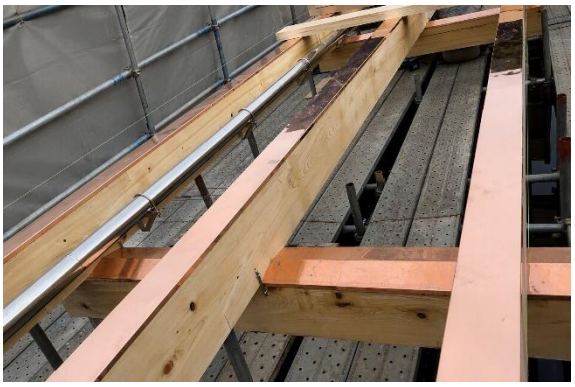
本工事では、文化財庭園内の木橋であることを踏まえ、素地仕上げの意匠と庭園景観との連続性を保ちながら、現在の利用水準に対応した耐久性及び安全性を確保することを基本方針とした。木部材の更新に当たっては、部材ごとの役割、荷重条件及び納まりに応じて、材質、木取り、木表・木裏の向き、保存処理、接合・補強方法等を整理した。

主要な木部材には檜材を用い、床板には節の少ない上小節材を採用した。また、劣化しやすい箇所に応じて、芯去り、芯持



写真－1　お伝い橋

ち、木裏使用等を使い分け、素地仕上げによる木材の質感を継承しつつ、腐朽や反りに対する耐久性の向上を図った。



写真－2　雨水対策として葺設した保護銅板

４．施工の工夫

施工に当たっては、木部材の耐久性を高め、橋梁の長寿命化を図るため、雨水の滞留や湿気による劣化対策を重点的に行った。従前の外観保持を原則とし、木材の選定、木取り、納まり及び水仕舞の工夫により、素地仕上げの質感を保ちながら耐久性を高めた。床板では、節部を起点とする劣化リスクを低減するため上小節材を使用し、通常とは異なり木裏を上面に用いることで、乾燥収縮後も雨水が滞留しにくい納まりとした。また、橋桁、横梁、面戸板、大引、土台等の上端には保護銅板を設置し、外観への影響を抑えつつ腐朽しやすい箇所の耐久性を高めた（写真－２）。



写真－3　伝統的な木組み構法と錺金具

橋本体は、従来の部材構成及び納まりを踏まえ、仕口・継手等の木組みを主体とした伝統的な構法を基本として修復した（写真－３）。その上で、現在の利用水準及び安全性を確保するため、必要な箇所に限り、外観上見えない位置にステンレス製金物を用いて補強した。これにより、従来の意匠と構法を維持しながら、安全性の向上を図った。

藤棚の修復では、既存の藤や周辺景観への影響に配慮し、柱、桁、梁、方杖、竹桟等の木・竹製部材を修復した。既存の藤は撤去せず、枝葉や幹を養生し、全ての枝を１本ずつ吊り上げて作業空間を確保した。また、既存位置及び高さを確認し、同位置・同高さに設置することで、植物の生育環境と庭園景観の連続性を保ちながら部材交換を行った。

５．まとめ

本事業では、お伝い橋、中島の御茶屋の露台及び藤棚の木・竹製部材を修復し、大泉水周辺の景観施設としての機能と意匠を回復した。特にお伝い橋では、木材仕様、木取り、木表・木裏の使い分け、保存処理、保護銅板による雨水対策等を整理し、素地仕上げの意匠を保ちつつ、部材ごとの劣化特性や納まりに応じて木部材の耐久性向上及び橋の長寿命化を図った。あわせて、従来の木組みを主体とした構法を継承しつつ、外観に配慮した補強を行うことで、安全性を高めた。

また、緑青が定着した錺金物の再使用や、既存の藤を活かした藤棚の修復により、細部意匠や庭園景観の連続性にも配慮した。文化財庭園の修復では、旧来の意匠や技術を継承しつつ、現在の利用状況に応じた安全性と耐久性を確保することが重要である。今後も、橋の劣化状況や採用した仕様・工法の効果を検証し、受け継がれてきた文化財の価値を損なうことなく、確実に次世代へ継承していく必要がある。